

連載
博聞意伝 世代を超えて未来を語る

第5回

〔聞き手〕

福川伸次

澁澤健

〔一財〕地球産業文化研究所顧問

〔日本国際交流センター理事長〕

〔東洋大学理事長〕

二十一世紀は協調と人間の世紀

澁澤 『ほほづゑ』の同人の方々には豊富な経験、高い見識の持ち主であられます。その経験、見識を次の世代に伝えていただきたい、その橋渡しを果たすべく、この対談企画が始まりました。そして「博聞意伝」第五回は、福川伸次さんにご登場いただきました。さっそくお話を伺っていきます。



まず、現在の日本の状況をどのように捉えておられるか、というところから伺います。

福川 時代は今や大きな転換点にあるのだろーと思えます。それはグローバルゼーションへの対応です。世界全体の動きもそうだし、日本もそうです。まず日本の方から考えてみると、今までの成長を支えてきた条件が変化して来ている。従って、今後どのような成長力を保てるかということを考え直さなければならぬ時期に来ていると思います。人口が減少し、人口構成そのものが変化しています。そして日本に対する国際的な評価もかなり下がっています。人々の意識も段々と内向きになって来ている。世界がグローバル化している中で、なんとなく日本は異なった動きをしてしまっている。そこで、日本はどういうふうに変化を成長に結びつけて行けるか、ということが問われています。

世界を見渡してみても、今まで、十九世紀はイギリス主導、二十世紀はアメリカ主導でした。そして

二十一世紀はどうなるのかということですが、世界のパワー構造が多極化している今日、これから一極の力に依存して秩序を維持してゆくという状況はなくなっています。そうするとどうしても主要国が協調して行かなければなりません。しかし、多極化のもとでは国際社会の合意形成がむずかしい。何故ならば、個々の国の存在感が低くなり、それぞれの国の政治が大衆迎合的になり、自己主張が強くなるという傾向があります。従って秩序の求心力が低下するのです。そうした中で、日本もこれまでとは環境が変わって来ている。その上で、国際社会に対してどのような貢献が出来るかが問われてくるのだと思います。

世界はこれからは人口が増加してくるし、資源エネルギーへの制約が強くなる。環境問題も悪化する。そうになると、今までのような、産業革命以来の成長の条件というのが大きく変わってしまい、このことを一体どういうふうと考えていったらいいのか、と



福川 伸次

持国として、国際社会が受け入れるかどうかは難しい。世界の秩序が米中二極抜きには考えられないけれども、米中二極で保てるということでもないということだと思っています。

多極化の中でどうやって国際秩序を保っていくのか、またその中で日本がどういう役割を果たしてゆくのかという、大事な時期にあるのです。まさに人類の英知が問い直されているという感じがします。一方日本においては、人口が減ってくる。財政は借金漬けになっている。加えて海外の識者が心配しているのは、日本の産業のイノベーション（技術革新）力が落ちてしまっているということです。かつてのトップ企業だった電機、電子産業の地位が低下している。韓国、中国、台湾の企業の業績が伸びている。例えば特許の出願件数を見ても、昨年、日本は三十四万件で前年から較べると約二十五パーセント減っています。中国は非常に伸びていて五十二万件、アメリカもやや停滞で五十万件ということで、まさに

ということが問題になると思います。

そういう意味で、日本においても、世界においても大きな転換点にきている。そこで、新しい仕組みをどのように築いていけば良いのか、ということが大事になってくると思います。

先日、米中二国間首脳会談があり、米中二極体制というものが出来るのか関心が持たれています。米中二国および中国にその意図はあっても、現実には秩序維

日本もアメリカも特許出願件数では中国に抜かれてしまったのです。そして産業の競争力ですが、円レートの動向如何でどうなるのかこれも分からないという状況ですね。

そして、世界を見ると、先程も申し上げたように、多極化しており、なんとか自国を有利にしたものだから、政権を維持するためにどうしてもポピュリズム（大衆迎合）的な思考になり、膨張経済政策を取っている訳ですね。財政を刺激し、金融を緩和する。世界中に過剰流動性が広がっていて、あちこちにインバランス（不均衡）が生じている。何かひとつ事件があればどこで噴き出すか分からない、そういう状況になっています。過言かも知れませんが、大恐慌の予兆のような不安感が生じる状況ですね。だから、どのように世界のグローバリズムを保っていくかということが大事で、それには協調が大切だと思います。

日本には、社会の中の相互信頼と協調、そしてそ

れを保とうという伝統的な価値観があると思います。それから最近では少しすたれたかも知れませんが、奥義を究めようという、自己陶冶（じこたう）という姿勢があります。そして、異文化に対する寛容性があり、そのことを勧めようという要素もあります。それから自然との共存と言いますか、自然との調和という伝統的な意識もある。そう考えてみると、日本社会の特質というものは、これからの色々な課題の中で発揮できるかも知れない、という思いもあります。

澁澤 色々なテーマを出していただきました。盛んに多極化という言葉を使われましたが、まったく同様のことで、私は多様性と言っていますが、この多極化・多様性について掘り下げてみたいと思います。今おっしゃったことに私はまったく同感ですが、一般的に日本は画一社会であると言われていますが、結構異文化を受け入れてきていると思います。それも、あまりにも自然に行われているので気づいていない面もあるのですが、例えば、言葉表記にしても、

同じ日本語なのに、漢字で「心」と、カタカナで「ココロ」、平仮名で「こころ」とするのでは微妙にニュアンスが違ってきます。

多極性とグローバルゼーションの中でどのよう
秩序を保つかということですが、ひとつは、共有の
ルールで決めましょうということ、これはまさに
グローバルスタンダードでしょう。これは世界を同
じ尺度で測ろうというルール・ベース（規則性）で
非常に分かり易いのですが、でもなにかフィット感
がないという感があります。もう一つはプリンシプ
ル・ベース（原理性）という言葉がありますが、こ
れは物差しというよりも、共有する土台、普遍的な
価値観ということですね。ただ、こうして言葉にす
るのは簡単なのですが、この場合、土台というのは
何なのだろうかと常に考えています。

福川 そうですね。どのように評価するかというこ
とですが、二十世紀は、技術革新が非常に進歩した
世紀でした。同時に対立があった世紀でもありまし

互に理解し得る可能性があり、協調への基盤になる
と私は思っています。

二十世紀は物質中心の経済システムでしたが、二
十一世紀には、物質経済的な繁栄よりも、人々が理
解し合い、精神的で文化的な経済と社会になると思
います。要するに人間の基礎的な欲求を越えて、外
縁的に拡大し、人間的な価値を重視して、精神的な
充足感とか、文化的な満足感とか、美しさとか、そ



山崎 健

た。二度の世界大戦があつて、東西の冷戦があつた。
技術進歩は経済を豊かにしたけれども、同時に対立
を煽つたという要素もありました。

先程イノベーション（技術革新）力が落ちてい
ると申し上げましたが、成長に向けて今後イノベー
ションの可能性は大きいと思います。ICT（情報
通信技術）などがそれだと思えますが、ICTが進
むことによつて、新しい可能性が拓けていくとい
うことだと思います。イノベーションを加速しますと、
いわゆるユビキタス（いつでも、誰でも誰とでも連結
できる環境と技術）という状況が創出できる。従つ
て相互に理解し合う基盤が進んでいくと思います。
もちろん、イスラム世界のように理解しにくいもの
もあるかもしれませんが、ユビキタス社会では価値
観が共通とまでは言えないとしても、相互に理解し
合える手段が提供されるということだと思います。

山崎 世の中が繋がっているということですね。

福川 教育の場によつて知識を増やして行けば、相

ういうものを尊重する時代になるのではないかと思
います。

私は、二十一世紀というのは、「協調と人間の世
紀」と謳うたわれるのではないかと、そんな気がしてい
ます。

百聞は一見に如かず

―百聞は一考に如かず、百考を百行につなぐ

山崎 多極化した世の中で、グローバルな視座で見
ると、それが東京であろうが北京であろうが、
ニューヨークであろうが、ある意味で都市化してし
まうと、ブランドが似た様な、みんな同じ様な服を
着るような、物質的な共有の傾向があるように思
います。もう一つは、人間として何が大事なのかとい
うことであり、日本人であれ、中国人であれ、アメ
リカ人であれ、共通しているのは、次の世代にいい
世の中を遺したいという気持ちは、共通なのだろう
と思います。そのことは如何なのでしょう。

福川 「百聞は一見に如かず」とよく言いますが、見聞を広げるのが第一だと思います。ただ、見聞を広げただけでは新しい知識にはなりません。考えてみるということが必要です。自分で思索し、評価し、新しいものを考えだすということが必要です。「百聞は一見に如かず」だけれども、「百見は一考に如かず」なのです。考えるからこそ意義があるのです。そして、考えた末の叡智を行動に移さなければならぬということです。行動に移してこそ社会に貢献できるのです。つまり「百考を百行」百の行動につなげて行く。このことが大切なのでしょうね。

澁澤 百聞いて百見て、さらに百考えて百行動する、なるほど。これはいいですね。(笑)

それでは、日本人は百聞いて、百見ることが出来る。そして、百を考えるというところに拘わりたいと思います。では、日本人の考える思考というのはどの様なことになりますか。

福川 先ほど申し上げたように、奥義を窮めるとい

うことは日本の伝統だと思います。茶道とか華道だとか書道だとか剣道だとか、武士道もそうでしょうが、形だけではなくて精神的な進化を尊重します。精神まで浄化し美を追求する伝統があると思います。ただ、それが受け継がれているか、最近そのことが問題だという感じがしています。

澁澤 ○○道というものはいかがなものでしょうか。社会のごく一部、上層のものであって、それが社会全体に広がらないのか、それとも江戸期以前はそれ程に裾が広がったのでしょうか。日本の現代社会を見ていると、意識の高い人は随分高いのですが、それは決して社会全体ではないように見えます。

福川 若い人たちの間では、情報伝達はほとんどメールですね。メールの時代というのはあまり思考しませんね。メールに依存している人たちは、考える力が疎かにならざるを得ないでしょうね。それに携帯電話とかの細切れの情報では、思想は生まれな

わせて、新しいものを創って行くということが大事でしょうね。学校で習ったことは知識ですが、メールでの情報でも何でも、それらを組み立てて、新しい何かを創りあげてゆくことが大切です。イノベーションというのは、そうした延長線上にあるのでしょうかね。

澁澤 考えるということは、全く違う分野にあるAとBを、こうやって、ああやって繋げるのだなと思考することだと思のです。ただ今の教育の現状は、受験して受かればという競争が目立ち、異なったものを繋げる思考をするどころか、バスに乗り遅れないようにすることに汲々とする、ということところだと思えます。

福川 そうですね。大学受験でも、センター試験で適正能力を問うといっても記憶中心です。昔は私なども「行間を読む」とよく言われました。ただ情報を受け止めるだけではなくて、その背後にある思想とか、考え方を高めなければならぬのです。

スマートフォンを作るにしても、ICTの技術によって組み立てるのですが、どうすれば人々のニーズに合うかということが大切です。アメリカや、この頃は韓国や中国も最近盛んになって来ましたが、日本では新しいものを創る能力が遅れてしまったのではないかと思います。

澁澤 もともと素質が無い訳ではなくて、そのような機会が子どもの頃から希薄であるということなのでしょうかね。

福川 奈良、平安時代に、遣隋使、遣唐使を派遣した頃は、大陸の文化を採り入れて、それを日本の伝統的なものと組み合わせ、先程おっしゃったように、漢字から平仮名を作り、『枕草子』のような文学を書き上げたのです。今正倉院の御物などを見ても、伝来の文化そのままの物まねではありません。海外の文化を入れていくけれども、日本の伝統的な文化と組み合わせ、日本の新しい美しさを作り出している訳です。日本はそういう素質があると私は

思っています。ただこの頃、ひたすら記憶中心の知識だけというところがあります。

澁澤 クリエーティビティに遊びがないと、クリエイティビティというのは面白くないと思いますね。今の子ども達を見ていても、何も粋をはめずに自由に遊びに行きなさい、ということが少ないように思います。私の子どもたちは、学校から帰ると宿題、塾、とかで、日程が詰まっています。ただ子ども達は子ども達で、隙間を見つけて遊びの工夫をしているようですが。

福川 プログラムになっていくんですね。……昔話になって恐縮ですが、日本の産業発展段階においてそのリード役が、鉄鋼、造船などの重厚長大、半導体などの軽薄短小産業へと移行することが指摘された時期がありました。それでその次はどうかという議論があった一九八六年頃、私がまだ通産省にいた時ですが、これからは「美感遊創」、すなわち「美しさ」「感性」「遊び心」「創造」を目指す時代になる

大きい皿に大きく盛って出て来るというイメージがあります。そうではなくて美しい皿に少しづつ盛って出て来ました。

澁澤 日本の懷石料理の影響ですね。

福川 そうでしょうね。やはり所得水準が上がってくると、国の別なく人類は求めるものが変わってくるのです。

グローバル時代のコミュニケーション

澁澤 日本の省庁の中で、ご出身の通産省、今の経済産業省は、国内の産業を支えて世界に能動的に打って出るお役所だと思っっているのですが、他はどちらかというと守るというイメージがあります。守るだけでは成長はあり得ませんからね。

福川 そういう意味では、素質というか可能性は日本にはあると思いますね。ただ一つ問題があるのはコミュニケーション力です。それはまず、コミュニケーションの的確な訳語がありません。コミュニ

と指摘したことがありました。マーケット(市場)がそういう傾向になって、ものづくりの方もそれを反映して伸びて行くと考えたのです。「美感遊創」という、美しさとか感性の刺激とか、今おっしゃった遊びとかがなければ伸びないという考え方ですね。人との付き合いも一種の遊びです。実際の中から新しい智慧も浮かぶ。そして創造性がなければ駄目だということだと思えます。私は、伝統的な日本の文化の中には「美感遊創」の精神があると思っています。

澁澤 確かに日本人の感性は、世界でも評価されていて、例えば食の文化なども高く評価されていますが、これはなぜかという規制が少ないからだと思います。この材料はこの料理以外には使いませんか、フランス料理と中国料理を一緒には使いたいか、そういった規制は日本の食にはありませんよね。むしろ融通無碍。

福川 懷石風のフランス料理があります。先日北京に行った折に体験したのですが、中国料理という

コミュニケーションに相応しい日本語が無いのです。日本ではきちんとコミュニケーションする、論理的に説明するところが弱いんです。これをグローバル化の中の的確に説明していくことが必要だと思えます。先程の世界に伝えるという意味で、日本食がいかにいいか、日本庭園がいかに素晴らしいかという様なことをきちんと言わないといけませんね。感じる人は感じるのかもしれませんが、口で説明出来ないと感じません。

我々は日常、コミュニケーションという表現を日本語のように使っていますが、本来コミュニケーションには、意志とか情報の伝達、理解の深化そして共感の醸成を包含しています。その三つの段階があるのですが、これをいい表す日本語がない。これから世界で、あるいはアジアで、日本の価値観を理解してもらおうといっても、日本に長く住んで居たり、日本人と長く交わっている人は別として、そこを外国人に分ってもらうことは、伝統的に日本人

は不得意です。日本には美しいものが確かにあります。文学では村上春樹さんのような方も出て来ています。

澁澤 日常の日本語には主語が明確ではありませんよね。それと、会話の末尾まで肯定、否定が明確ではありません。英語だと最初にコミットしないと会話にならないのです。

福川 韓国の方で呉善花^{オ・ソンファ}さんという日本に長く居る日本研究者がいますが、彼女がおっしゃるには、日本語と韓国語では表現が違うというんですね。例えば、奥さんが家出した時に、日本人は「家内に逃げられた」と言うが、韓国人は「家内が逃げた」と言うのだそうです。そうすると、「逃げられた」と言うのと、逃げられた方が悪そうに聞こえますが、「逃げた」と言うと、逃げた方が悪そうに聞こえるというのです（笑）。ですから言葉というものは面白いですね。

コミュニケーション能力をどのように高めてゆく

澁澤 昨日、ミャンマーの仏教徒とイスラム教徒との諍いの惨状を聞きました。本来宗教は人を救うためにある筈なのに、宗教の関わりで一体どれだけの人が命を落としたのかということを見ると、果てしがありませんね。

福川 その点日本は異文化に対して寛容ですね。異文化を吸収してしまうところがありますからね。グローバリゼーション時代では、日本が異文化を採り入れる好機だと思いますね。

澁澤 その反面、日本は村社会というか、群れて壁を作りますよね。例えば外国人がたどたどしい日本語をしゃべると、「日本語がお上手ですね」と言いますが、流暢な日本語をしゃべられると、途端に警戒するところがありますよね（笑）。専門別による村もありますね。それが無くなると面白い連携が取れてゆけるのに勿体無いと思います。

福川 日本社会の特質は二十一世紀の新しい時代のニーズに適応出来るのではないかと、私は思っています。

かは決定的に重要です。事業でも国際展開して行く場合、コミュニケーション力、英語力が大事ですね。それをどのように高めて行くのが課題でしょうね。

澁澤 先日、国際会議の席で、会議の最後にサーッと通して定義書をまとめるのですが、向こうの座長の「Any Questions?」という問いかけに対して、こちら側はシーンとしてしまっていて、「はい、ありませんね。じゃあこれで終わり」というような流れになりそうだったので、ちよつと首を出したら、コテンパンに却下されました（笑）。最終的には訂正を受け入れてくれましたが。

福川 私は日本の良さはまだ多くあるし、世界から評価されるべきものもあるだろうと思います。異宗教に対しての寛容性もそのひとつです。これは文化交流が進む時に大事な要素になると思いますね。イスラムのように教理が違う、宗派が違うと相容れないというのは、グローバリゼーションは成り立ちませんからね。

ます。それをどうやって掘り起こしていくかということですね。

澁澤 そうですよ。そのためには何が必要ですかね。外圧ですかね（笑）。

福川 認識することです。

澁澤 そうすると先程の、百を聞いて、百を見て、百を考えるのだけれど、百の行動までいかなければならないのですよね。では考えることから行動までの壁は何なのでしょうね。

福川 それは自信がないからでしょうね。もう少しきちんと考えて、よしこれなら行けると自信を持つ。それには相手がどう考えるかを理解した上で動かなければならないでしょう。しかし、そういうところの交流がまだ乏しい。海外との交流、グローバルな付き合いに関してもつと経験を積む必要があります。ところが、近年日本人の海外留学生が少なくなつたと聞きます。これは困ったことだと思いますね。

澁澤 今、文部科学省では、留学生の数を増やそう

という構想を持ってまして、文科大臣のもとで意見交換会があり、私も加わっています。メンバーは私と同じ四、五十代くらいのもので、自分で会社を興している人が多いのですが、そこで意見交換をされていて、「どういう様に変えるべきか」という意見、材料は沢山出ていると思うのですが、それが行動に移すところまで至っていないというのが現状ですね。ずっと以前から議論はされて来たと思うのですが、どこか抵抗する部分があるのだらうと思います。

福川 そういった抵抗はあるのでしょうか。特に政治を見ていると、自己決定能力が下がっているようです。これがなかなか行動に移らない原因です。日本人はよく「罪の文化」よりも「恥の文化」と言われていますが、これをやると人がどう思うかを真先に考えてしまう。政治家が一番考えることは、これをやると選挙に負けやしないかという、何が最適かということより、どうやって人に受け入れられるかという、大衆迎合的な発想がどうしてもありますね。

それは、企業の中でも、他社追随型というのがありますね。

アメリカにいらっしやったからお分りかと思いますが、八〇年代の日本がまだ隆盛を極めた頃ですが、変なジョークがアメリカで流行りました。それはある日本の銀行の役員会でのジョークです。担当の役員が或る提案をした。すると頭取が三つ聞いた。一つは「前例はあるか」、二つ目は「他行は何をやっているか」、三つ目は「大蔵省はどう言っているか」(笑)。それがアメリカ人には受けるのです。少し恥ずかしい思いをしました。

澁澤 今もあまり変わらないかも知れませんね(笑)。

福川 もう少し自分でものを決定する能力を磨かないといけませんね。今の学生の就職もそうですよ。とにかくエントリーシートを百も二百も出すのでしよう。すると、受かったところが希望の会社ということになる。

澁澤 新聞掲載の写真で見たのですが、今の時代の入学式の若者の姿と、八〇年代の入学式の写真を比較掲載していました。八〇年代は服装がバラバラなのですが、今はネットか何かのマニユアル情報があるのか、皆同じ格好をしているんです。びっくりしました(笑)。

福川 街はそろそろ就活の時期で、まったくその通りのリクルートスーツ姿が見られることになりませんが、個性的な良さというものを出さないと、新しいものは生まれませんということですね。

九〇年代の話で恐縮ですが、アメリカの3Mのリビオ・デジモニ会長が言っていました、「同じ価値観の集団からは新しいものは生まれません」というのです。今日、会社でも、官庁でも指示待ち人間が多い。言われたことは上手にこなすのだけれど、自分から問題を発掘し、問題を解決するというタイプが非常に減っていますね。……百の行動をしてもらわないといけません(笑)。

澁澤 ずっと画一された一つの答えだけを追いかけて来ましたがね。複数の答えがあるということには、なかなか対応出来ないでしょうね。

福川 そこで改善しなければならぬ点は多々あると思いますが、私は日本文化はこの二十一世紀で花開き得ると思っています。

澁澤 私もそう思います。先程からのキーワードである日本独自の感性というものです。その感性さえ縛られることがなければ開花すると私も思います。ですが、結構成功という前例に縛られますよね。そうすると新しいことが出来なくなる。

そこで伺いたいのは、電機産業と自動車産業とではどうしてこんなに差が出来たのでしょうか。自動車はまだまだ世界で競争力がありますが、電機産業が追い付かれたのはどうしてだろうか。

福川 あれは私も残念至極で、分析してもよく分からないのですが、産業的な特性において、自動車は日本に向いていて、電機、電子が韓国の方が得意と

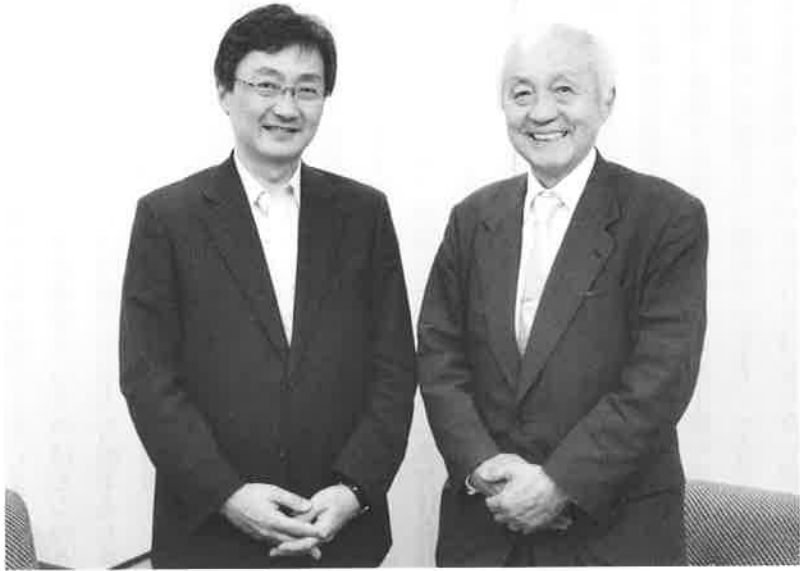
いうことではなくて、やはり企業経営の差ではないかと思えます。

澁澤 でも、電機産業にも独創的な技術は多くありましたよね。

福川 そうですね。しかし肝心なところで経営の判断を誤ったことがあるのかも知れませんね。

しかし、修正すればいいことですから、どうしてもあのようなことになったのか。日本の場合少しでも弱みが出るとみんなに叩かれてしまいますからね。よくマーケットイン（顧客の意向を尊重したビジネス）という言い方をしますが、マーケットインの努力は自動車業界の方が優れていたような気がしますね。電機製品を見ていると、みんな同じ様なものを作っていて、マーケットが何を求めているかという研究が遅れてはいないか。よく韓国の人が言うのは、「日本の冷蔵庫を買っても、キムチが保存出来ない」と。生活に合っていないことですね。

澁澤 どういう自動車を運転するかとか、アイポッ



ドかウォークマンかは分かりませんが、自分のライフスタイルの表現の仕方としては同じことなのに、どうして差が出て来てしまったのでしょうか。

福川 やはり、マーケットの把握の問題でしょうね。

遺してゆくべき日本の美

澁澤 日本のイノベーション（技術革新）の分野で世界に通じるものは何かと考えた場合、サービス産業がまず浮かぶのですが、日本のサービス産業は弱いとよく言われますね。それは、私思うには、「サービス」と言う場合、「無償です」という受け止めをされてしまう。無償では産業になりませんからね。だから物がないと商売にならないという感覚になっちゃっているのかなと思います。

福川 だけど、コンビニエンス・ストアなどは、日本発の新しいビジネスだし、宅配便などもそうですね。日本独特の時間と手間のサービスですね。それに、アニメのような成功例もあるし、ファッションでも

日本独自の美的感覚があります。

少し前に戻って恐縮ですが、日本庭園というのは、欧州の、例えばヴェルサイユ宮殿の庭園が幾何学的な美しさを備えているのに対し、自然や借景を生かしています。月が出た時、鳥が飛んだときを想定して庭師が設計しています。それは、一つは四季の変化の反映でもあります。

この頃日本女性は着物を着なくなっていますが、あわせ 袷、ひとえ 単衣、しよ 紗やろ 絹というように四季に相応した装いがありますね。西欧のファッションは直截的で、色彩にしても赤とか黄とかがパツと躍っていますが、日本の着物は中間色を取り入れています。「ぼかし」の技術で、色と色が互いに混じり合うように変化してゆく。それは日本の四季のゆるやかな変化、寒暖の間に春秋の中間の季節があるという自然条件の反映です。従って中間色とか中間領域があるというのは、他にはない日本の特色ですね。中国に行くと見ると、赤とか黄、緑が眼にパツと飛び込んで来ます。

その点、日本の美意識は大変高度だと思えます。

澁澤 そういう独特の美的感覚というのはどここのところで培やしなわれるのでしょうかね。日本人も欧米人も赤ん坊の時は同じだとすれば。やはり育つ環境ということでしょうかね。

福川 生活環境でしょう。生活の中で、知らず知らずの内に身に付いて来るものなのでしょうね。だから、イタリアのデザインがなぜ優れているかという、街のたたずまいの反映だと言われます。日本の美とは違いますが、やはり歴史、伝統に裏付けられた美意識ということなのでしょう。

澁澤 そうした美意識に基づいた、今後の日本の街作りということではいかがですか。

福川 問題はそれかも知れませんが、確かに日本の街には優れた点があつて、東京でも、安全とか、清潔きんじやくが高く評価されます。それから地下鉄や新幹線など交通網の正確さも、優れています。一方で、住宅などはまだ改良していかなければならない点があり

ますね。

澁澤 その、日本人の矛盾も、また強さの一因となつているのかも知れませんがね。伝統の美的感覚を持ちながら、ごちゃごちゃとした街に住む矛盾、この矛盾も日本の強さということでしょうかね。

福川 何でも受け入れて吸収してしまふ、寛容性ということでしょうかね。だから、これからグローバルゼーションに向かった時は、強いと思います。

澁澤 様々伺つて来ました。それでは最後に、次世代へのメッセージを一言お願いします。

福川 未来を考える時は歴史に学べ、ということですね。歴史は、変化の手掛かりになるのです。未来を考える時の手本は、歩んできた歴史にあるのです。
澁澤 聞いて、見て、考えて、行動する。ということですね。ありがとうございました。

(ふくかわしんじ／しぶさわけん)